
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 84

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 1661. 未来という現在に飛ぶ意識
- 1662. 自己、この未知なるもの
- 1663. 大惨事と遭遇する夢
- 1664. 旧西ドイツの首都ボンの市内より
- 1665. トライアンドエラーを通じて
- 1666. 魂の遍歴
- 1667. 余白と学習
- 1668. 学習におけるデータ収集と検証
- 1669. 総合の時期へ
- 1670. 自己言及的かつ自己産出的な実践
- 1671. 最終試験に向けて
- 1672. 継続性という背景
- 1673. 誕生日だった
- 1674. 落ち葉の舞
- 1675. 舞と灯火
- 1676. 沈みゆく夕日の中で
- 1677. フレデリック・ショパンとの出会い
- 1678. ショパンの望郷の想い
- 1679. とある日曜日の午前
- 1680. 音楽と共にあった一日

今日は朝の九時から、大学のカフェテリアでグループミーティングを行った。「学習理論と教授法」のクラスで課せられている協働論文執筆の課題も大詰めを迎え、最後のミーティングをメンバーと行った。

ちょうど昨日、論文のドラフトを基にしたプレゼンをクラスで行い、ドラフトに対して担当教授からフィードバックがあった。そのフィードバックを基に、論文を練り直していく必要がある。

今日のミーティングでは、得られたフィードバックの中のどれに焦点を当て、その観点をどれほどまでに自分たちの論文に反映していくかを話し合った。時間にして一時間ほどのミーティングであり、最終的には、ドラフトの中で取り上げた三つの項目のうち、一つを削り、二つの内容を充実させる方向になった。今週の日曜日までに、各々の担当箇所の修正をこなすことを約束し、一時間強ほどでミーティングを終えた。

キャンパスから自宅に戻ると、少しばかり頭が冴えない感じがあった。ちょうど今日は昼食前に身体を動かそうと思っていたため、頭の冴えを取り戻すために、ランニングに出かけた。うっすらとした雲が空全体を覆っている中、いつもと同じように、ノーダープラントソン公園へ向かった。

心身を整える上で、身体を動かすことはとても効果があるように思う。また、このように自然の中を走るとは大きな気分転換となる。ノーダープラントソン公園を走りながら、私はなぜだか、来年から生活予定の米国の地でのランニング場所について思いを巡らせていた。その場所には大きな川があり、川沿いを走っている自分の姿が目に見えた。今からまだ一年弱先のことであり、しかも、本来に来年の今頃にその場所にいるかはまだ確定したわけでは全くないのに、なぜだか私は、その川沿いを走ってる自分の姿を想像することができた。

ノーダープラントソン公園を抜け、行きつけのインドネシアンレストランでいつもの昼食を注文した。いつも世話をしてくれる店員の男性は、私がいつも何を注文しているかをすでに覚えてくれており、「いつもの？」と尋ねてくれるようになった。普段注文している品を受け取り、その足で行きつけのチーズ屋に向かった。ちょうど今、チーズ屋の前の道が大きな工事の最中であり、店に入るための特別

の道が一時的に作られていた。そこを歩いていくと、店主の姿を確認することができ、すぐに挨拶を交わした。このチーズ屋の二人の店主も、私に対していつも好意的に接してくれる。

基本的に毎週このチーズ屋に立ち寄り、いつもお決まりのナッツ類を購入する。そして、チーズはオーガニックの一年発酵物を購入している。しかし、ここ最近では、毎回足を運ぶたびに、チーズに関しては新しいものを購入するようにしている。特に大きな理由はないのだが、食わず嫌いをするのではなく、とりあえずこの店に置いているチーズを色々と試してみようと思うようになったのである。

変化させないものと変化させるものとの調和。そのような調和の実現をなそうとする意思が自分の中に芽生えているのかもしれない。

自宅に戻り、先ほど持ち帰ったインドネシアン料理を食べた。毎週全く同じ物を食べているが、いつも非常に美味しく感じる。運動後であるから尚更そのように感じるのかもしれない。舌鼓を打ちながら昼食を食べている時、先ほどのランニングのように、再び意識が未来に飛んだ。

「この大学でオフィスを持つてから数日が経ち、今オフィスの窓の外には、紅葉した木々が静かにたたずんでいる姿が見える」という未来の日記を綴っている自分の姿が見えた。今日と同じような、薄い雲が空全体を覆った秋のとある一日の姿が脳裏に浮かんでいた。その大学は、自分にとってとても大切な場所であるように思えて仕方ない。2017/10/18(水) 13:59

No.306: Catastrophic Dream

The impression about the dream last night remains. A couple of limited express trains had a rear-end accident. It was a catastrophe. The train that I took was safe, but the subsequent trains were disastrous. In addition, the previous train also had a catastrophic accident to crash into a station.

What does the calamitous event imply for me? Although the dream showed me such a cataclysmic event, my psyche was undisturbed when I woke up. 07:32, Thursday, 10/19/2017

1662. 自己、この未知なるもの

書斎の中に音楽だけが静かに流れる夜。辺りは真っ暗であり、自分の内側の世界と呼応するかのように、外の世界も静かだ。

自分は今、欧州の地にいる。オランダという国にいるということを、なぜだか強く噛み締める夜だ。

今日は朝からとても寒い。早朝、大学のキャンパスに行く際に、マフラーを持って自宅を出発しなかったことを少し後悔するぐらいに、今日は寒い一日であった。これからこの地は、冬に向けての準備を始める。それに際して、自分は準備をしているだろうか。準備に準備を重ねたとしても、今年の冬に経験されることは、今の私の予想を超えたものになるであろうことが予想される。

準備を超え、予想を超えた経験をもたらすもの。それが今年の冬の一つの大きな特徴だろう。

自分がこの世界に存在していると言える確かな実感が欲しい時がある。自己がこの世界に存在しているという確かな実感。今日は昼間から、そのような実感の存在証明について考えが一瞬及んだ。

自分の認識をどのように保てば、あるいは、どのように変容させていけば、自分がこの世界に存在しているということを証明することができるのか、という問題である。欧州での日々は、いつも私に一人の人間として生きていくことに関する問題を突きつけてくる。就寝前の不気味な思念の創発だけではなく、日中の一挙手一投足の中に、一呼吸の中に、自分が人間として生きることを考えさせる契機が宿っている。

自分は果たして存在しているのだろうか、自分はなぜ欧州の土地にいるのか、という問いが生まれたのは、昼間に洗面所で手を洗っている時だった。水道の蛇口を閉じた瞬間に、それらの問いが開いた。そして、その問いを契機として、連続的な思念のうねりが流れ出した。閉じたはずの水道の蛇口が、静かに銀色の光を発していた。

何度でも、何度でも繰り返し書き留めておきたいと思う。自分が何を考え、何を感じながら異国の地で日々を生きているのかということ。

今から十年後の自分はやってくるのだろうか。やってくるのであれば、その時の自分は今綴っている一連の日記をどのような気持ちで読むのだろうか。

今から二十年後の自分はやってくるのだろうか。やってくるのであれば、その時の自分はこれらの日記をどのような気持ちで読むのだろうか。

今から八十年後の自分にわかってほしいこと、伝えたいことが一つあるとすれば、今の私はできる限り毎日を懸命に生きているということだ。

今の生活を選択したのは自分である。過去の自分には戻れないほどに、変容の波が自分を違う場所へと連れていく。内面世界の中で、もはや戻れない場所がいくつも増えた。同時に、外面世界の中でも、もはや戻れない場所がいくつも生まれた。進むことは、戻れなくなるということを影に内包しているのかもしれない。

昨年の自分はどこに行ってしまったのだろうか。それを探そうとするのは無意味であろう。もしかすると、今の自分を定位させることも無意味な試みなのかもしれない。人が一生涯にわたって変容を遂げていくということ。それは極めて恐ろしい現象であるように思える。自分が未知の世界に足を一步一步踏み入れていくことが恐ろしいのではない。変容に伴い、自分の存在そのものが一層未知なものになることが恐ろしいのだ。

変容の一步は、未知なる世界への一步ではない。自己の存在そのものがさらに未知なる存在に化すという恐怖がそこにある。

明日への一步。それはさらに自己が未知な存在に変貌を遂げることを意味する一步である。その一步の重みを受け止めながら、それでもまた新たな一步を踏み出していくことができるだろうか。

2017/10/18(水)20:43

No.307: Trial and Error for Music Composition

Trial and error is a vital element for our learning. I compose music every day little by little. I try to apply a new concept and technique to my music work whenever I compose music. That is kind of my musical experiment.

The continuous trial and error will someday open a new window on my music composition. Until then, I will engage in a myriad of ceaseless trial and error. This principle is applicable to all kinds of learning. 09:35, Thursday, 10/19/2017

1663. 大惨事と遭遇する夢

早朝、目を覚ました瞬間に、随分と起床時の状態が良いことに気づいた。目覚めと共に、自分の内側に何か光が灯っているかのようにであった。一方、早朝の六時前のフローニンゲンは闇の世界であった。今朝の目覚めの良さは、昨日に行ったランニングや、就寝前にいつもより入念に行っていた青竹踏みと関係しているかもしれない。自らの身体をいかに鍛え、いかに休息させるかは、極めて大事であることを改めて思う。

昨夜の夢は印象的なものだった。私は名古屋のある大型書店にいた。そこは、何階にもわたるフロアを持った大きな書店であり、店内は広く、明るい光を発していた。店内を歩いていると、向こうから一人の男性が私に声をかけてきた。どうやらその男性は、この書店の店長であるらしい。私は、その方の顔に見覚えがあり、名前もうる覚えだが、お互いに面識があるようだった。出会ったその場で少し立ち話をしていると、その店長が私にある提案を持ちかけた。

店長:「今から東京の大型書店に視察に行くのですが、一緒に来ますか？」

私:「ええ」

店長は私に笑顔でそのような提案を持ちかけ、私は東京の大型書店に関心があったので、提案に対して即座に快諾をした。店長の話では、東京の大型書店に視察に行くの同時に、そこで仕入れ交渉か何かをするらしかった。大型書店に視察という観点と仕入れ交渉という観点で足を踏み入れたことがなかったため、私は好奇心に従って店長についていくことにしたのである。

店長:「それでは一緒に行きましょう。この書店の地下に駅がありますから、そこから新幹線に乗って東京に向かいましょう」

店長がそのようなことを述べたとき、この書店と駅が直結していることに初めて気づいた。私たちは、どこか急ぎ足で書店の階段を降りていき、新幹線の待つ駅に向かった。

駅に到着すると、地下にあるはずなのに、なぜだかプラットホームが地上にあった。プラットホームに出てすぐの場所には屋根があるが、先頭車両の方のプラットホームには屋根がなかった。私たちは、どういうわけか、先頭車両の方に向かって歩いていた。すると、静かに雨が降り出した。

雨の降りしきる中、私たちはわざわざ雨に濡れる形でプラットホームの前方に向かって歩いていた。歩いている私たちを追いかけるかのように、新幹線がやってきた。

プラットホームで新幹線を待つことなく、すぐにそれに乗ることができて幸いであった。やってきた新幹線を見て、店長がおもむろに口を開いた。

店長:「いや～、この新幹線を逃したら、次の便が来るまでだいぶ時間があつたんですよ。私たちは運がいいですね」

車内に入ると、自由席用の車両、指定席用の車両、グリーン車の三つに分かれていた。私たちが乗り込んだ車両は、自由席用の車両であった。しかし、私たちは指定席に座ることになっていたため、そこから車両を移動することにした。車内を移動してみると、この新幹線の車内の様子は、普通の新幹線とだいぶ違った。座席の配置が、いつも見ているようなものではなかった。なぜだか席の配置がとてもいびつであり、それでいて何らかの規則に基づいて配列されているようだった。

自分たちの席を発見した頃には、新幹線は名古屋を出発して幾分の時間が過ぎていた。窓際の自分の席に腰掛けた瞬間に、窓の外を眺めると、自分たちの新幹線を追いかけてくる別の新幹線が遠くの方に見えた。だが突然、その新幹線が脱線し、もの凄い勢いでレールを破壊しながら新幹線が炎上し始めた。それに続いて、さらに後方からやってきた別の新幹線が、炎上した新幹線に追突した。

新幹線の追突事故は、大惨事の様子を呈していた。私たちの新幹線に乗っている誰もが、絵も言えない恐怖と不安に駆られていた。その恐怖と不安に追い打ちをかけるように、私たちの前を走る新幹線も断線し、とある駅に向かって突っ込んだらしかった。自分たちの乗る新幹線の前後の新幹線が大惨事に見舞われるという事態を、私はうまく飲み込むことができなかった。

それらの大惨事のため、私たちの新幹線も緊急停止することになった。乗客たちが居ても立っても居られなくなり、次々に新幹線から降り始めた。だが、新幹線の外の世界は、全く何も見えない闇の世界だった。「私たちも降りますか？」と店長に確認しようとしたところ、隣にいたはずの店長は消えていた。

私は一人になり、結局新幹線から降りることにした。しかし、そこはプラットホームではなく、線路の上であった。さらに、視界が真っ暗であることが、どこことなく私に緊張感を強いていた。すると、線路の前方から何やら懐かしい声が聞こえた。

その声のする方に足早で歩いていくと、声の主は幼少時代の友人たちだった。私もその輪の中に入れてもらい、これからどうやってこの線路から脱出し、お互いの目的地に向かうかを話し合った。

私たちは反対側の線路の上を歩いており、すると、その線路の上を走ってくる新幹線が後ろからやってくる気配がした。このまま線路の上を歩いていると轢かれてしまうため、線路上にある緊急避難場所を探した。

ちょうど私たちは、新幹線の通過駅にいらしく、線路の横にプラットホームがあった。だが、プラットホームに上がろうとする時間すらもないぐらいに、新幹線が後ろから迫ってきていることがわかった。そのため、プラットホームの下にある空間に緊急避難することにした。

友人の何名かが先にその避難場所に到着し、そこから私を呼ぶ声がした。声だけを頼りに、暗闇の中を急いで走り、私はなんとか無事に避難場所に滑り込んだ。その瞬間に、新幹線がものすごい勢いで通り過ぎて行った。

私たちは助かったのである。その事実一同が安堵の表情を浮かべた。

その避難場所は、プラットホームの下であるため、立っていられるほどのスペースはなく、全員が地面に寝そべる形でその場にいた。すると、その地面と見上げた先にあるコンクリートの上を、無数のナメクジのような小さな虫が這いつくばっていた。その光景がとても気持ち悪く、私たちは一刻も早くその避難場所から外に出ようと思った。そこで夢の場面が変わった。2017/10/19(木)06:41

I have created enough space in my work so far today. It has worked very well. I suppose that the underlying mechanism of spacing is that our brains require enough rest to effectively function.

I intentionally took a short break several times during work and changed subjects that I worked for. Taking a rest and changing a learning topic at a certain interval would be conducive to learning in that they refresh our brains. I experienced such an advantage of spacing today. 16:29, Thursday, 10/19/2017

1664. 旧西ドイツの首都ボンの市内より

新幹線が追突する大惨事の夢は、無意識の大きな連続的な流れの一部であった。それを証明するように、その夢から次の夢への移行は滑らかになされた。無意識の中の同じ階層内を移動したという感覚、あるいは、違う階層なのだが、階層間の移行が極めて速やかになされたような感覚があった。

夢の次の場面では、私はドイツのボンにいた。この街は、ベートーヴェンが生誕した場所であることを私は知っていた。私は何のためにボンに来たのか、その理由については不明である。

気づけばボンにいたのだ。どうやら今は三月らしい。三月のボンは、乾燥しており、寒さがまだ厳しかった。しかし、天気には恵まれており、その瞬間のボンの空は、雲ひとつない青空だった。

私はボンの街中にたたずみ、青空をただぼんやりと眺めていた。辺りを歩く人の姿は見られず、空を眺めているのは私だけのようだった。「空が自分を呼んだから空を見ていた」とでも言えるように、私は薄い青色をした空をじっと眺めていた。すると、本当に空が自分を呼んでいたことを証明するかのように、私は空の中へ溶け出していった。

その感覚に包まれた時、私はボンの市内にある建物の中の一室にいた。そこには、中学校時代にお世話になった数学の先生と、私の友人が数名いた。先生が突然私に質問をしてきた。

数学の先生:「ボンの三月の気候を説明する文章として、正しいのはこの二つのうちどっち？」

先生は私に、ボンの気候を説明する文章を二つ提示した。なぜだか、それらの文章は英語で書かれていた。

私:「Aだと思います」

数学の先生:「残念、正解はBね」

私:「いや、三月のボンは雨量が少なく、乾燥した気候が特徴なので、正解はやはりAですよ」

先生は笑顔を浮かべながら私の説明に耳を傾けていた。私もその質問に対して本気で回答していたわけではなく、私も笑顔を浮かべながら、もう少し説明を加えた。

私:「確かに、客観的な天候データはBを示すのですが、主観的な体験からもたらされるデータはAを示すと思いますよ。いや、より正確には、Bの回答は随分と古い天候データを用いており、自分たちの肉眼や体感を用いれば、それが誤りであることにすぐに気付き、Aの記述が正しいことが分かるかと思います」

先生は私の説明に対して笑顔でうなづいていた。その部屋の窓の外には、ボンの市街が開放的に広がっていた。

そこで夢から覚めた。夢から覚めた後、この夢について少しばかり考えを巡らせていた。

その前に見た、新幹線が追突する夢も非常に強い印象を残しているが、その夢については、何かを考える時期ではないような気がしている。「夢が考えられることを避けている」と表現することができるだろうか。その夢がいかに印象的であったとしても、私の方もあまりその夢を取り上げようという気持ちにならない。その夢よりも、ボンの市内にいた夢の方に私の関心が向かっている。

とはいえ、この夢について考える糸口のようなものはほとんどない。一つだけ言えるのは、私が以前からボンの街に関心を持っていたということだ。ベートーヴェンが生誕した街であるということだけが、私を惹きつけていた。実際に、ボンの街にはいつか足を運ぼうという思いがある。

ボンの街について私が言えるのは、その程度のことしかない。だが、ボンの街へ実際に足を運んでみようという気持ちが再度ふつふつと沸き立つことを促すような夢だった、ということは確かである。

2017/10/19(木)07:16

【追記】

上記の夢を見てから一年以上が経ち、改めて夢の内容に着目してみると、単に私がボンの街に関心を持っていたという以上に、夢の中の先生とのやり取りに着目してみる必要があると思った。端的に述べると、夢の中の先生とのやり取りは、「客観的」を標榜する現代の科学のあり方、ないしは客観的であることを絶対的と勘違いする多くの現代人に対して待ったをかけるようなシンボルとして登場していたのかもしれない。

線形的な思考しかできないモダニストが大きな勢力を持つ現代の科学コミュニティーでは、主観的なものを貴重なデータだとみなす意識が希薄である。そうした事態については、アメリカの思想家のケン・ウィルバーも批判している通りである。そうした事態は、人間の意識という主観的な現象に対する研究を停滞させているように思う。もちろん、意識を脳の観点から研究することは進んでいるが、これこそがまさに「脳」という外部現象に人間の意識を還元する非常に狭い研究アプローチであることがわかるだろう。

例えば、超越体験や宗教的体験、さらには高度な意識段階の特徴を客観的なデータだけを頼りに探究していくことには限界があり、そこでは主観的なデータを活用していくことが余儀なくされる。この点に関して、ルドルフ・シュタイナーが遙か昔に、私たちの霊性(スピリチャリティ)を主観的なデータを参照しながら科学的に探究していたことの功績を改めて考える。主観的・客観的な双方の観点を持って人間を包括的に探究していたことに、シュタイナーの先見性があるように思える。フローニンゲン:2018/12/27(木)11:54

No.309: Anticipation

I will attempt to synthesize my previous expertise when I am in the university that I will go to next. My central theme is human development and learning. I want to research on them from the perspectives of developmental science, educational science, systems science, and network

science. At the same time, I have a strong passion to explore philosophy of education and music composition.

I need to go to a university that is a knowledge power house to enable me to accomplish what I am thinking right now. I found a few candidates of such a university all over the world. My anticipation soars. 08:26, Friday, 10/20/2017

1665. トライアンドエラーを通じて

早朝から深い霧が辺りを包んでいた。その様子はまるで、雪の世界であった。

深い霧が随分と晴れてきたのは、十時を過ぎた頃だった。今朝は早朝の六時から仕事を開始させた。九時頃を迎えてから、「学習理論と教授法」の最終試験に向けて、課題文献を再度読み返すことを行っていた。

心理学科に所属していた去年は、どのコースも二時間の試験であった。しかし、教育学科では試験の時間がさらに一時間ほど長く、三時間ほどに及ぶ。私が履修しているコースではないが、どうやら四時間に及ぶものもあるらしい。

記述式試験に向けて学習をする際に、単に文献を読んでいるだけでは全く意味がない。そもそも、それらの文献の内容を理解することは、最終試験のためにあるのではない。より長期的な視野を持って、今後の自らの研究や実務の糧になるようなものでなければならない。そうしたことを考えると、なおさら課題文献を単に読み返すことは不十分だという思いになる。

今日の取り組みは、確かに課題文献の再確認である。各回の講義内容をもう一度思い返すために、講義資料を読み返し、同時に課題文献を読み返すことを行っていた。しかし、それは将来の糧になるような意味での学習には程遠い。こうした確認作業が終わった後に、私がなすべきことは、文献で書かれていることを自分の言葉でまとめていくということである。その際には、実際に文章の形にしていくことが最も望ましい。

幸いにも、今回の試験では、課題文献を含め、自分で作成したノート類を持ち込むことができる。

そうしたことを踏まえると、自分の言葉で事前に考えをまとめておくことは有益だろう。しかし、繰り返しになるが、試験のために学習するという意識は、今の私の中にはほとんどない。

もちろん、フローニンゲン大学のようなオランダを代表する研究大学院において、最終試験を通過することが難しいという事実があるため、試験の対策は念入りなものにしなければならない。だが、私の中で重要なのは、今の学習内容を今後の学習につなげ、獲得された知見や技術が、今後の研究や実務の中で滲み出るようにしていくことである。そのためには、知識と技術を血肉化させるべく、とにかく自分の言葉を通じて自分の身体にそれらを体現させていくことが重要になるだろう。今日の午後も引き続き、その作業に従事する。

午前中に休憩を兼ねて、作曲の学習を行っていた。ここしばらくは、就寝前に一時間ほど、実際に曲を作るという実践に従事することが習慣になっていた。確かに実践に勝るものはないのだが、実践だけでは自分の作曲技術が高まることはないと理解している。そうしたことから、理想的には、作曲理論や音楽理論を学ぶ時間を一時間ほど確保し、実際に曲を作る時間を一時間ほど取ることができればとても理想的だという考えが浮かんた。

今の私の仕事は曲を作ることではないため、一日の中で作曲に充てることのできる時間はせいぜい二時間が限度だろう。この二時間はとても貴重な時間であり、逆に毎日二時間を作曲の学習と実践に充てることができれば、自分が思い描いている表現状態に至れるような日がいつか来るだろう。

理想的には、一時間の学習の中で得られた新しい概念や方法を、その日の最後の作曲実践で活用してみるという流れを作りたい。新たな知識項目を学び、それを実際に曲を作る中で活用するのである。それはいわば、トライアンドエラーの精神に基づく実践であり、いかに多くの実験を行い、いかに多くの失敗体験を積むことができるかが、作曲技術を深めることに直結してくるだろう。

新しいことを一つ学び、それを試す際に、これまで学んだ作曲規則に反することが生まれてしまうかもしれない。今はそうした規則違反を気にするよりも、とにかく新しい知識と技術を曲の中で試すことに焦点を当てる。これは作曲に限らず、他の学習項目にも多分に当てはまることだと思うが、いかに

数多くのトライアンドエラーを経験し、その過程の中で内省的にトライアンドエラーの結果を考察し、内省で得られた新たな気づきを次の実験につなげていくことが大切になる。

今日から作曲理論の学習に一時間ほどの時間を充て、作曲実践に一時間ほどの時間を充てることを習慣としたい。そして、一日の最後の作曲実践の場で、その日に学習した項目をトライアンドエラーの精神を持って実験するということを絶えず行う。そうした日々がこれから続くことになるだろう。2017/10/19(木)11:42

No.310: Problem-Based Learning

I cultivate my knowledge and skill of music composition by problem-based learning. I tackle with an issue of music composition, which I have found through composing music.

Finding out own issues, collecting data to solve them, and testing own hypotheses by actual practice would be kind of problem-based learning. Learning opportunities are everywhere at every moment. I want to engage in lifelong learning with the scientific mind. 08:34, Friday, 10/20/2017

1666. 魂の遍歴

夜の八時を回り、今日も一日が終わりに近づいている。充実さの密度空間の中で、瞬間瞬間の呼吸が続けている感覚。今日もそのような一日であったと形容できる。

早朝の霧の世界から、今はすっかり闇の世界に様変わりしている。夕食を摂り終え、先ほど「実証的教育学」の講義資料を最初から最後まで読み返していると、またしても自分が自己から離れる瞬間があった。あるいは逆に、自己が自分から離れる瞬間があった。それは単純明快な感覚であり、自分も自己も、どちらの存在も一緒くたに把握することができる知覚である。

ヨーロッパという地は、自分を自己から引き剥がし、もう一度自分を自己に引き戻すことを私に促してくる。両者の存在を同時に把握する感覚は、生きることの本質的な感覚を常に喚起する。生きていることの神秘さや奇跡という表現を超え、生きているということの究極的な謎を突きつける。北欧に近い北オランダのこの街は、日が沈む時刻が早まったこの時期において、そうした問いをたびたび私に投げかけてくる。そのたびごとに私は立ち止まり、その問いの促しに従う。問いに応えようと

することはない。なぜなら、そのような問いに応えることなどできないからだ。できることがあるとすれば、それは、ただそうした問いの促しに従い、促しから新たな感覚や次なる問いを得ることだけである。

読むことと書くことに関して、私はもはや外側からの強制によってそれらの行為に従事することができなくなった。知的好奇心の求めるままに文献を読み、文章を書くということも超えつつあるように思う。それはもはや、魂の赴くままに文献を読み、文章を書くという姿の方が近い。

近い将来に、自分はまた新たな土地で生活をしなければならないのだと思う。それを望むのは、自分の魂である。

昼食前に、近所のスーパーに向かっている最中、運河を架ける橋を渡ろうとした時に、「魂の遍歴性」というものについて考えていた。どうも自分の魂は、遍歴を求め、遍歴の過程を通じてしか育まれていかない存在のようだ。

世の中には、きっと自分と同じような魂を持つ人がいると思う。後一年ほどで、私は一旦ヨーロッパの地を離れようと思う。再び米国に戻り、そこからまたヨーロッパに戻ってきたいと思う。私の魂は、そうした遍歴を欲しているようなのだ。

そのようなことを思いながら、運河を架ける橋を渡り切った時、フローニンゲンの街の光景がより深くなったように知覚された。この冬は、再び自己の内側で何かが起こりそうな予感がしている。今日が終わり、明日がやってくるのと同じぐらいの予感であり、それは本当に起こるべき形で起こるだろう。

2017/10/19(木) 20:14

No.311: Healing and Transformative Power of Music and Art

Perhaps, music composition and painting play a crucial role in healing and transforming my psyche everyday. Strictly speaking, I do not draw a painting but choose a picture everyday that fits an entry of my journal. To appreciate pictures is quite conducive to cultivating my psyche.

I did not notice the immense healing and transformational power of art appreciation, although I heard of the effectiveness many times. Music and art are indispensable to my daily life and entire life. 09:09, Friday, 10/20/2017

1667. 余白と学習

良質の睡眠を取ることができたためか、今朝の目覚めは非常に良い。基本的に就寝時間はいつも一定だが、その日の心身の状態に応じて、若干睡眠時間が変化する。

今朝はいつもより遅めの六時半の起床となった。質の良い睡眠を取るとは、何をすることにおいても重要だと思う。学習に限って見ても、学習した知識や技術を文字通り寝かせ、自分の内側に定着させる際にも良質な睡眠が大切となる。人間発達や学習について探究を進めていると、必ず身体や脳についても知る必要が出てくる。最近特に、脳についての探究をいつか本腰を入れて行う必要があるかもしれないと思っている。

昨日、教育科学に関する論文を読んでいた時に、「私たちは効果的な学習についてほとんど知っていない」という記述を目にした。ここで述べている「私たち」というのは、主に学習者を指している。学習者である私たちは、効果的な学習方法を習得する訓練を積んでいないのではないだろうか。

学習対象となる知識項目を学ぼうとするだけであり、それらの知識項目をどのように学んでいくのか、という方法論を習得する機会と訓練が、多くの場合欠落しているように思う。その結果、学習者は効果的な学習方法ではないやり方で知識項目と向き合うことになる。それが結果的に、知識項目の不十分な習得を招いてしまっていることが多々あるだろう。一つは冒頭の話とつながっており、例えば、知識項目を学習する際に、いかにそれを寝かせるか、ということである。

教育哲学者のパウロ・フレイレが警鐘を鳴らしていたように、「銀行型教育」を採用してはならない。これは単純な知識の詰め込みであり、学習者が真に知識を獲得し、それを活用できるようになることを妨げる。ここでふと思ったのは、一見すると、自分が日々の探究活動の中で行っていることは知識の詰め込みと言えなくもない。日々、文献を通じて、かなりの量の知識項目と向き合う生活をしている。

しかしそれは、フレイレが指摘した銀行型教育のような意味での詰め込みではない。フレイレが批判していたのは、一つの知識項目から次の知識項目へと、一切の余白なく知識を流し込もうとする学習方法であり、ある知識項目と向き合った際に、それを咀嚼するような内省実践、とりわけ文章を書くというような能動的な学習の欠如を批判していたのである。

昨日は、ある知識項目から別の知識項目へ移行する際に、意図的に余白を設けるようなことを行っていた。ある程度のまとまりを持つ単元の探究を進めたら、そのまま次の単元に行くのではなく、そこで一度休息を挟んだ。そこでの休息は、文字どおり、身体を軽く動かすというような休息もあれば、学習した単元に対して文章を書くという実践も含まれる。特に、後者の文章を書くという実践は、学習した単元の知識を咀嚼し、自己に定着させる効果を持つ。

先ほど学習した項目に対して文章を書こうとすると、自ずと学習内容を再想起することになり、自分の言葉で文章を書く際には、自分の理解度をそこで検証することができる。こうした学習内容の再想起と理解度の検証を行うために、学習内容を自分の言葉で書くということはとても効果的だろう。逆に言えば、こうした実践を行わなければ、知識項目が真に我が物になることはない。最後に、こうした文章執筆に加え、余白を設ける実践としては、一つの項目の探究をある程度行ったら、探究項目を大きく変えてみるというのも一つの手だろう。

昨日は、教育科学についての論文をしばらく読んだ後、作曲に関する学習を行っていた。そして、しばらくしてまた教育科学の文献に戻ってきてみると、作曲の学習が自分の中で能動的な余白として機能しており、その前後の教育科学の探究にも随分と好影響を及ぼしていることがわかった。このように、学習内容について文章を書くという実践と、探究項目を意図的に大きく変えるということは、探究項目間に余白を作ることになり、さらには、それらの探究項目の習得を促進するような働きがあるように思える。2017/10/20(金)07:21

No.312: Dark Blue Sky

The start of today was a little bit late. I got up at 7:00 and began today's work at 7:30. The dark blue sky is spreading out in front of my eyes. I often have a neutral feeling to the dark blue sky. Yet, I have a positive feeling today. The more I am looking at it, the more tasteful the sky becomes. The adjective of "tasteful" may not be correct. The perfect one might be "tasty."

The dark blue sky is tasty today. However, it is difficult to find out a perfect word or phrase to articulate the taste. In that sense, the dark blue sky transcends me. Therefore, I cannot detect a word to describe it, and at the same time, I have a positive feeling toward it. 08:25, Saturday, 10/21/2017

1668. 学習におけるデータ収集と検証

今日が何曜日であるのかを分らなくするぐらいに、起床直後の外の世界は闇に包まれている。闇が曜日を覆い隠してしまうかのようだ。起床直後の世界は、いつも闇に包まれているため、その様子を見ただけでは、その日が何曜日なのか分からない。

姿の見えない一羽の小鳥が、どこかで鳴いている。変動性の中に潜む規則性を持った形で、その小鳥は鳴いている。闇の中で鳴く小鳥の声に耳を澄ませながら、今日が金曜日であることを確認した。

今日は午前中に、「実証的教育学」の最終回のクラスで行われるプレゼンの資料を作成したいと思う。当日のプレゼンの時間は長くなく、15分程度のものである。

先日、「学習理論と教授法」のクラスにおいても、ほぼ同様の時間のプレゼンを行った。現在、応募結果待ちの、来年の六月のジャン・ピアジェ学会での研究発表も、それぐらいの時間のプレゼンになる。プレゼンに関して、特殊な訓練を受けたことはないが、おそらくプレゼンに関する方法論というものが存在しているのだろう。それを習得しているのと習得していないのとでは、おそらく相手に伝わる度合いが大きく左右されるように思う。

これまでそうした訓練を体系立てて積んだことがないため、私は自分なりにそうした方法論を確立していく必要がある。とりわけ、毎回のプレゼンから何らかの反省点や検証材料を持ち帰る必要がある。毎日プレゼンを行っているわけでは決していないから、一回一回のプレゼンの機会は、実践の場であるだけでなく、データ収集の場でもある。来週のプレゼンにおいても、先日のプレゼンから得られた事柄を検証するようにし、さらに新たなデータを収集しようと思う。人はつくづく学びの中に絶えずいるのだということを実感する。こうしたプレゼン一つ取ってみても、それは学習に他ならない。

自分で選定した学校に対して、学校改革案を練り、それを今回のプレゼンで発表する。問題分析、目標設定、改革に向けた介入方法の選択、介入方法の導入戦略とタイムスケジュール、関連当事者の責任、そうした項目についてプレゼンすることになるだろう。プレゼン時間が15分間と短いため、プレゼンで用いるスライドの枚数はそれほど多くない。今日の午前中に、それらのスライドのドラフトを作成したいと思う。

午後からは、「評価研究の理論と手法」と「学習理論と教授法」のコースの最終試験に向けた準備を行う。昨日の段階で、両者のコースの文献と講義資料に再度目を通すことができたので、今日からは、昨年に出題された記述問題に対して実際に回答していくことを行う。また、その過程の中で、自分が出題者であればどのような問題を策問するかを考え、その問いに対して自分なりの回答を準備したいと思う。どちらの試験も記述式であり、三時間の長丁場である。

前者のコースの最終試験は、巨大なコンピューター室で行われ、割り当てられたコンピューターを用いて回答する形式になっている。つまり、記述式問題に対して、コンピューターを用いてタイピングをすることができる。一方、後者のコースの最終試験は、すべて手書きで行う形式だ。個人的に、コンピューターを用いてタイピングをする方が好きなのだが、いずれの形式であっても、準備の方法は同じであり、これまで学んだことを入念に咀嚼していきたいと思う。

フローニンゲンの早朝の空が青黒くなり、これから新たな一日が始まることを静かに告げている。遠方でカラスが鳴き声を上げた。2017/10/20(金)07:44

No.313: Continuity of Background in Our Daily Life

I compose music for one hour every day just before going to bed. Music composition has recently been my habitual practice. Ideally, I want to spend one more hour to learn music theory and theory of music composition. However, it is not so easy for me to have such an hour before night, but it would be possible.

Two hours, just two hours are enough for my immersion in music. Continuity is key for my practice. If our life is continuous, I want to make my daily practice continuous. Of course, a

transient and temporary event occurs in our life, which add a flavor to it. Yet, we need the background of continuity so that such a transient and temporary event can radiate.

Yes, continuity is the indispensable background for our daily life. Writing and learning are my continuous practice. Once they become dissolved into the background of my daily life, a transient and temporary event in my life can shine more.

Vandaag is het mijn verjaardag. Today seems to be my birthday. I noticed it right now. 09:26,
Saturday, 10/21/2017

1669. 総合の時期へ

昨夜少しばかり、来年から所属予定の米国の大学について思いを馳せていた。米国のジョン・エフ・ケネディ大学にせよ、現在のフローニンゲン大学にせよ、それらの場所でしか探究することのできないことを深く学ぶために、それらの大学に所属してきた。つまり、ある特定の探究項目に対する知識と技術を深めるために、それらの大学に籍を置いてきたのである。そうした大学での探究のおかげもあり、自分の中で専門性というものが徐々に涵養された。

もちろん、既存の専門性をさらに深めていくということと同時に、新たな専門性を身につけていくという実践に日々従事しているが、これまで培った専門性を総合的に研究に活かせる場を求めた際に、来年から所属予定の大学の名前が挙がった。その大学には、今の自分の専門性をさらに涵養する場だけではなく、新たな専門性を開拓する場も豊富にある。そして何よりも、これまでの自分の専門性を大いに試す場が無数に存在している。

来年からの自分の主題は、「総合」という言葉に集約されるかもしれない。これまで培った知識と技術を総合的に発揮させる中で研究に従事し、その過程の中で、既存の専門性を深耕させ、新たな専門性を開拓していくことになるだろう。そうしたことに思いを巡らせながら、今後の博士論文についても考えを巡らせていた。

人間発達と学習を中心テーマとすることは、これまでと変わらない。そのテーマを探究するための科学分野として、発達科学、教育科学、システム科学、ネットワーク科学などが挙げられる。博士論

文という比較的分量の多い論文を執筆する試みの中で、是非ともそれらの科学領域の知見を盛り込んできたいと思う。次の大学で総合的に探究を深めていくのは、まさにそれらの四つの領域である。

博士論文を執筆する際に、複数の査読付き論文をまとめる形を取りたいと思う。しかしその際に、一つの一貫したストーリーを博士論文に持たせることができるかどうかについて、昨夜少々考えていた。というのも、人間発達と教育というテーマに対して、システム科学とネットワーク科学の双方を適用した研究というのは、これまでほとんどなされていないからである。

ただ、自分の学術的関心は、それらの科学領域の中にあり、それらを架橋することにある。私が米国のその大学に着目したのは、それら四つの科学領域を横断的に探究し、その探究成果を架橋させる形で博士論文を執筆できると判断したからである。さらには、その大学の音楽教育が充実している点も見逃すことができない。学術的な探究に並行して、作曲実践も同時に行っていく機会が豊富にあることを想像するだけで、期待に胸が膨らむ。

音楽と教育というテーマで研究を一つ行ってみたいという考えが湧き上がる。小学生の音楽教育でもいいし、成人の音楽教育でもいい。とにかく一つ、音楽に関する研究を、システム科学とネットワーク科学の観点から行ってみたいと思う。次の大学は、そうした思いを具現化させてくれる場所である。

2017/10/20(金)08:14

No.314: Chopin's Day

Just after I got up in the morning, I suddenly became intrigued by Haydn's piano works. I searched his music scores. Fortunately, I found some scores that looked beneficial for my music composition. Also, I tried to find out a book containing his letters or diaries, but I could not find it. My interest made a jump from Haydn's works to Chopin's works. I downloaded the complete edition of his works whose running time is more than 19 hours. In addition, I downloaded some other CDs including his Nocturnes, Etudes, Mazurkas, and Preludes. I will listen to them from now, so today will be a day for Chopin. 06:57, Sunday, 10/22/2017

書くことは、既存の知識を再想起することを促し、同時に、新たな知識と体験を既存の知識と結びつけることを促す。そうした促しによって、知識と経験のネットワークが頑強なものになっていく。結局、自分が毎日、様々な時間帯に文章を書き留めているのは、過去の自分との関連を起点にして、新たな自己に向かっていく支援を行っているにすぎないのかもしれない。

人は必ず自分から出発する。出発の起点は他者にはない。常に自分の中にあるのだ。それは、過去の自分が積み上げてきたものである。既存の知識と経験、そして自己そのものに参照する形で文章を絶えず書いていく。こうした実践が、これまでの自分とこれからの自分を繋いでいく。そして、そうした架橋作業に従事しているのは、現在の自分であり、繋がれる者も実は現在の自己なのだ。

いずれにせよ、これまで自分が蓄積してきた知識と経験を参照しながら、新たな知識と体験を咀嚼していくことは重要な試みとして私の中にある。もしかすると、この試みが唯一、自分が前に進むための方法なのかもしれない。

自己言及的に進むということ。自己言及によって、自己産出を促していくこと。それを実現させる有力な一つの手段が、まさに書くことなのだ。ここで述べている書くことというのは、主に文章を書くことだが、実際には自然言語による記述にとどまらない。昨日も実感していたが、曲を書く過程の中にも、紛れもなく、自己言及的かつ自己産出的な要素が含まれている。

曲を書く最中においても、これまでに習得してきた理論と技術を参照し、今の自分を参照することが余儀なくされる。まさに作曲は、過去の自分に触れることを通じて、今の自分から新たな自己を創出していく試みに他ならないように思える。

昨日も一つの曲を作ってみたが、一通り曲を作り終えてみた時に、それを作った自己はどの時点の自己なのかを考えていた。それは多分に、過去の自分であり、現在の自分であり、さらには未来の自分でもある。それら三者は切り離せない関係を結んでいるがゆえに、その曲を作ったのは、三者の総体である今の自分だと言えるだろう。

昨日は、午前中に学習していた、楽譜の中で速度を示す表示方法、奏法を示す表示方法と強弱を示す表示方法を実際の自分の曲の中に適用してみた。午前中に目を通していた文献曰く、それらの表示方法が盛り込まれていないものは、楽譜としての整備がなされておらず、楽譜とはいえないものなのだそうだ。その記述が後押しをし、それらの知識項目を自分の曲の中に適用するという実践を行っていたのが昨日だ。

今私が使っている作曲専用のソフトには、様々な装飾記号が含まれており、理解の及ばない記号が無数に存在している。これからは、過去の作曲家の楽譜を参照した際に、これまで試したことのない装飾記号に注目をし、それを自分の曲の中で試すという実践を積んでいく。

昨日の午前中にグリーグの楽譜を眺め、昨夜にはバッハの楽譜を眺めていた。未だかつて試したことのない装飾記号は何かないか、という意識を持っていると、また新たな発見をした。楽譜を眺める際にも、単にそれらを眺めるのではなく、自分なりの問いと仮説を持ってそれらを眺めてみると、無数の発見がもたらされる。

今日も仕事の合間にどこかのタイミングで、問題意識を持って絵画を眺める感覚で、過去の作曲家の楽譜に目を通したいと思う。2017/10/20(金)10:03

No.315: Return Favor to My Teacher

All of a sudden, I recollected my old memory in my elementary school. When I was a sixth grader, I wrote a journal and submitted it to my teacher every day. My teacher always gave me a short comment on my entry and sometimes talked to me about what I wrote the day before.

I realize that his support was tremendous scaffolding for my writing skills. Without his support, I could not engage in writing like I do every day now.

I gave him my new book that was published last June. It might have been my unconscious return favor for his priceless support for me 20 years ago. 16:04, Sunday, 10/22/2017

今日は、早朝にいつもより多くの日記を書き留めていた。書き始めるまで、何をどれほど書くかは分からないことがほとんどである。

今朝は気がついてみると、普段早朝に文章を書くよりも多い分量の日記を書き留めていた。日記のタイトルと内容を読み返してみなければ、一日の終わりに近づいた今となっては、それらを思い出すことができない。早朝の私は、一体何に駆り立てられ、何を書いていたのだろうか。

午前中は予定通り、来週の水曜日に行われるプレゼンに向けての資料を作ることができた。プレゼン内容は、「実証的教育学」のコースの最終課題である学校改革案を紹介するものだ。こちらは、すでにドラフトを執筆したものの構成をそのまま活用することができたので、プレゼンスライドを作ることはそれほど難しくなかった。ただし、確認すると、当日の発表時間が質疑応答を除くと、10分程度しかなかったため、最重要な箇所だけ説明するスライドに仕立てていく必要があった。その点にだけ注意をしながら、プレゼン資料の作成を進めた。

午後からは、同じく「実証的教育学」のコースにおいて執筆した論文を、二人の受講生とレビューし合うという課題に取り組んでいた。今回のコースの中で出題された小課題を一緒に取り組んだことのある、キルステンとリサネにレビューを依頼するメールを数日前に送っていた。

今日の午後、キルステンからフィードバックと彼女の論文が送られてきた。早速、彼女の論文をレビューすることにし、午後の時間は夕食前までレビューに時間を充てていた。キルstenは元教師とのことであるが、どこで科学論文の執筆方法を学んだのか不思議に思うぐらいに、しっかりとした文章を執筆する。もちろん、オランダの学部教育において、科学論文の執筆作法を学んでいたのだろうが、これまで見てきたオランダ人の英文の中でも、極めて明瞭な英文である。

いくつか細かな点を含めてレビューを行い、夕食前にレビュー結果をキルステンにメールをした。明日か明後日にリサネの論文が送られてくるだろう。彼女の論文が送られてきたら、その日のうちにすぐにレビューを行おうと思う。

夕食後、再来週の水曜日に控えている、「学習理論と教授法」のコースの最終試験に向けた本格的な準備を開始させた。具体的には、コースを担当するダニー・コストンス教授であればどのような問題を出題するかを想定し、自分なりに想定設問を作成することから着手した。

まずは初回のクラスに関する想定設問を作成し、課題文献を参照しながら、自分で作った問いに自分の言葉で回答することを行っていた。明日と明後日も引き続き、同様のことを行う。仮に明後日の早い段階で、「学習理論と教授法」の最終試験の準備の第一段階が終われば、同様のことを「評価研究の理論と手法」のコースの最終試験に向けて行いたい。

問いを持ち、その問いに自ら応えようとする姿勢がなければ、知識項目が真に身につかないことを最近よく感じる。これらの試験に向けた準備は、自ら問いを立て、その問いに自分なりの回答を持つことの大切さを教えてくれている。2017/10/20(金)20:59

No.316: Shared Dream

I had a dream last night, which implies that my dream is shared with others. In other words, a certain realm of my unconscious is connected with that of others.

I was in a locker room with my friend in the dream last night. He suddenly began to talk about his dream last night. “Well, I had a strange dream last night. Like we are here right now, I was in this locker room. When I opened my locker, I found an underwear whose I didn’t know. Afterwards, I knew who had this, and this was…” “A’s! Wasn’t it? I had the same dream last night!”

Both of us were astonished at the fact that we shared the exact same dream. Since then, we had continued to talk about the dream with excitement. However, we gradually felt strange that we had the exact same dream. Both of us stopped sharing the story and started to wonder how it was possible.

This dream indicates that a certain realm of our consciousness can be linked with that of others.

07:10, Monday, 10/23/2017

今朝はとてもゆっくりとした起床となった。七時頃に起床し、七時半から仕事を開始した。

今、書斎の窓の外には、ダークブルーの世界が広がっている。普段はその青黒い空に否定的ではなく、中立的な感情を抱く。だが、今日は不思議と、その青黒い空に好感を持っている。その青黒い空を眺めれば眺めるほどに、味わいがあるのだ。

青黒い空の味を味わったことがあるだろうか。その味をうまく形容する言葉が見つからない。目の前に広がるこの青黒い空は、どうやら今の自分を超えているようだ。それゆえに、その味を表現する言葉が見つからず、それでいて好感を抱いているのはそのためだ。そのことだけが腑に落ちる。

昨日の自分も自分であり、昨日の自分と今日の自分が繋がっていることを自己証明するために、今日も昨日の続きから日記を書く。徐々に明るくなっていく空を前に、昨日に何をしていたのかを簡単に思い出していた。昨日の最後には、作曲実践をしていた。一時間ほどの時間を取り、また一つ小さな実験的な曲を作った。

そういえば、昨日か一昨日辺りに、一日のうち、一時間ほど作曲理論と音楽理論を学ぶ時間に充て、就寝前の一時間を作曲実践に充てることを習慣にする、ということを書いていたように思う。実際には、理論的な学習をする時間を日中に確保することはまだ難しく、それについては習慣となっていない。だが、就寝前の作曲実践に関しては完全に習慣になったようだ。

音楽を作ることによって、精神の治癒が起こり、自分の精神が少しずつ豊かになっていくのを実感する。作曲を始めてから、音楽への意識が絶えず存在しており、それが精神の癒しと肥やしに繋がっている。

一日一時間の作曲実践が習慣になった。もう一時間、作曲理論や音楽理論を学ぶ時間を設けることは決して不可能ではないだろう。むしろ、合計で二時間ほどの探究時間を設けることができるように生活を改めていく必要がある。二時間ほどの時間でいいのだ。ただし、それを毎日継続させていくことが何よりも大切だ。

継続。人生が日々継続していくものであるならば、日々の行為にも継続性を持たせたい。もちろん、一時的なものや一過性のものが日々の中に混入し、それらは人生を彩り豊かなものにしてくるのは確かだ。だが、一時的なものや一過性のものが輝くためには、継続性という背景が必要である。そうなのだ、おそらく継続性というのは、日々にとって不可欠な背景なのだ。

背景をより強固なものにするために、自分が心から欲する習慣的行為を確かなものにしたい。書くことと学ぶこと。両者は背景に過ぎず、また、背景であらねばならない。

もう完全に、自分の人生の基盤となる背景に浸透するまで、書くことと学ぶことを習慣にするのである。そうして培われた背景が、一時的なものや一過性のものをさらに美しく輝かせる。早朝のダークブルーの空や、書斎に鳴り響くバッハの曲の美しさが際立つのも、そうした背景があるからなのだ。

2017/10/21(土)08:07

No.317: Journal

I did not write an English journal so much yesterday. Instead, I kept a Japanese one as usual. The amount of my journal depends on a certain factor, but it is still latent.

Although I did not write a journal so much, I wrote a paper yesterday. It implies that I cannot live without writing. I hope to keep a journal to track my thought processes at every moment if possible. The contents of my thoughts can be trivial, but it does not matter. The point is to create and connect a flood of thoughts by writing.

I will write a journal as many as possible even if each entry is short; the length is inconsequential, but the continuous writing is consequential. 07:23, Tuesday, 10/24/2017

1673. 誕生日だった

Vandaag is het mijn verjaardag. 今日は自分の誕生日であることに、今気づいた。

昨夜就寝に向かう最中も、次の日が自分の誕生日であることなど一切意識をしていなかった。これらは決して、自分の誕生日の意味が薄れたことを示しているわけではない。むしろ逆に、誕生日が

意識に上らないほどに、その重要性が自己の内側に浸透したかのようだ。誕生日を誕生日として認識しているうちは、一人の自己としてまだ誕生していないのではないかと思う。

私たちが一つの自己として真に誕生するためには、ありとあらゆる既存の経験や概念を乗り越えていく必要がある。一年のある一日が自分の誕生日であると認識させられた経験を、その経験に飲み込まれることなく、経験そのものを対象化させることができるだろうか。

これまでの自己を構成するあらゆるものへ認識の光を当てることが可能になること。それが一つの自己としての真の誕生の証である。その点に関して言えば、私はようやく、一つの自己としての歩みを始めたように思える。

誕生日を祝すように、昨日は不思議な夢を見た。私は予備校のような場所で、これから授業を受けるようだった。しかし、一向にクラスが始まる様子はなく、突然、クイズ番組のようなものに自分が出演していることに気づいた。このクイズ番組の会場を眺めると、チーム対抗戦で競い合うような形式を取っていることに気づいた。なぜだか、私には他のメンバーがおらず、一人で参戦しているようだった。

会場は、段差のある大学教室のような作りになっており、私の前の席に、ある会社の若い社長と思われる人物が座っていた。しかし、私はその社長に声を掛けることをせず、クイズの進行を見守っていた。どうやら私にチームメンバーがいないのは、私は参加者というよりも、このクイズの解説者のような役割を務めているからのようだった。

クイズの一問目は、数学というよりも、算数と論理学を足し合わせたような問題だった。15個ぐらいの数字の羅列が、会場のモニターに映し出され、それらを一瞬にして計算する方法の論理を答えさせる問題だった。私もその問題に取り組んでみたが、自分よりも先に、あるチームがその回答を述べ、見事に正解した。

ここで残念ながら、一段低い場所に座っていた、私の目の前にいた若い社長たちのチームは敗退となった。この社長から話を聞いていたように、この会社は頭脳明晰な人たちだけで構成されている。今回のクイズ番組には、自社の中でも選りすぐりの精鋭を連れてきたようだった。実際に、私も

後ろから、彼が連れてきたチームメンバーが問題に答えようとする様子を見ていると、確かに彼らは非常に優秀な頭脳を持っていることをどことなく示していた。

その社長のチームは敗退となり、会場からゆっくりと去っていかうとした。私は、この社長に一言声をかけようと思い、後を追いかける形で、エレベーターホールに向かった。エレベーターホールに到着した瞬間に、私よりも先に、社長の方から私に声をかけてきた。その声に続いて、「先ほどは残念でしたね」と私が述べると、社長は「ええ、ただ、彼らにはいい経験になったでしょう」と述べた。

すると突然、社長の顔が変形した。社長の顔が、白い宇宙人のような顔になったのである。一瞬私は驚いたが、そういうことも十分にありうると思い、宇宙人の顔をした社長をエレベーターに送り出し、その場で別れた。

そこからもう一度、クイズ番組の会場に戻ってみると、会場の参加者が私を待っていたようだった。私がいなくなったことを待っていたのではなく、前回のクイズにおいて、最高成績を収めたことを祝するために私を待っていてくれたようだった。

自分の席に戻ると、面識のない二人の男性が、「明後日にでも食事に行きませんか？」と声をかけてきた。明後日は、ちょうど欧州に帰る日だったので、その申し出を丁寧に断った。実際には、夜に家の外で他人と食事を摂ることはできるだけ避けたいため、欧州に戻るという口実があったことは有り難かった。二人の男性の申し出を断ると、今度はクイズではなく、国語の授業が開始された。

この授業は、まさに予備校の授業のようであった。背の高い一人の若い女性講師が教室に入ってきて、授業を始めた。彼女はハーフのような顔立ちをしており、名前がシェリーだということを私は知っていた。授業が始まろうとするときに、段差のある教室の最前列の一番左側の席に座っている女性が、第一問目の解説を講師に代わって始めた。

講師のシェリーは、黙ってその女性の解説に耳を傾けている。女性の解説が終わったところで、シェリーが口を開いた。その日本語から察するに、彼女は日本で育っていない時期が随分あったことを感じ取った。だが、音の形は別として、シェリーの話す日本語の語彙は洗練されていた。

シェリーが「この文章の構成は、典型的な批評文ですね。脚注のこの言葉は・・・」と述べたところで、私は、天気雨が差し込む一台の車の中にいた。

光り輝くような天気雨が降っており、四つのドア全てが開けられた車の中に私はいた。家の前の駐車場に停められた車の中には、私以外にも二人の友人がいた。「天気雨が降ってきた！早くドアを閉めない」と一人の友人が叫び、私たちはできるだけ早くドアを閉めようとした。全てのドアを閉めた瞬間に、再びシェリーが講義を行う教室に戻り、そこで夢から覚めた。2017/10/21(土)09:12

No.318: My Ashes

Where can I go if I continue to write a journal? If the amount of my journals reach the moon, where can I go at that moment? Does my soul pierce the moon and permeate the universe?

Just before going to bed last night, I came up with a peculiar notion of whether I choose cremation or interment when I end my life. Probably, I will ask cremation. The next notion is also bizarre that I will ask my close relatives to scatter the half of my ashes to the Pacific Ocean and the other half to the outer space. I am convinced that such a day will actually come. 07:38, Tuesday, 10/24/2017

1674. 落ち葉の舞

先ほど昼食後の仕事を終え、夕方からの仕事に向けて昼寝をしていた。基本的に、毎日20分ほどの昼寝を欠かさず行っているが、昼寝の最中に時折不思議な体験に見舞われる。先ほどもそうだった。昼寝の時間が限られたものであるため、夢のような映像を伴うことは稀なのだが、仮に映像はなくても、体験として様々なことが昼寝の中で起こる。

ベッドに仰向けになり、15分経った頃に、自分が前のめりに何かに突っ込んでいく感覚があり、体が一瞬宙に浮かんだ。明瞭な映像ではないが、自分がブレーキを大きく踏んだようなビジョンが見えた。ブレーキの振動があまりにも強く、私の身体が宙に浮かんだようだった。

そういえば、数日前にも似たような体験を仮眠中にしていたことを思い出す。前に向かって猪突猛進しそうになる自分に対して、突然にそれを抑えようとするような自分がいるようだ。前に進もうとす

るエネルギーとそれを抑制しようとする相反するエネルギーがぶつかり合い、その衝撃に目を覚ますという体験である。先ほどの仮眠からの目覚めも、まさにそれだった。目を覚ましてみると、先ほどと同じように曇り空の隙間から、少しばかり太陽が顔を覗かせていた。

今日は早朝に雨が降り、今は雨が止んで、晴れ間を見せるような天気である。今年のフローニンゲンの秋は、どうも天候が変わりやすい。

気がつけば、書斎の窓の外から見える木々たちが裸になっている。秋の深まりと共に、冬の足音が聞こえて来る。目の前の木々の葉が散ったことに伴い、向こう側に見える赤レンガの家々がよりはっきりと見える。オランダを象徴するような、高さの低いレンガ造りの家々が立ち並ぶ姿が良く見える。

目の前の木々の葉が再び生い茂る頃、私は一体どこにいるのだろうか。今と同じように、書斎から木々を眺め、木々の向こう側の赤レンガの家々を目を凝らして見つめているのだろうか。来年の青葉が生い茂る頃、次なる活動拠点での生活に向けて静かに準備をしている自分の姿がまぶたに浮かぶ。これまでの自分の歩みは、次の活動拠点において結実するであろうという確信がある。

自分の能力や資質を考えれば、その場所に行くためには、これまでの人生の長大な期間が必要であった。そこに行きつくために、魂の様々な遍歴が不可欠であった。

一枚の落ち葉が風に乗り、赤レンガの屋根に届きそうなくらいの高さの場所で舞っている。仮に落ち葉であっても、その高さで自分の舞を披露することができるのだ。その葉が落ち葉になるまでの長大な時間と積み重ね、そして落ち葉になっても空高く舞う姿は、私の心を大きく動かした。

「落ち葉であったとしても、あんなに空高い場所で舞えるのだ」という言葉が自然と漏れた。人は誰も落ち葉になる。それは人間として、生物として生きていく上での宿命である。だが、落ち葉であっても天高く舞えるということを忘れてはならない。

その舞は誰にも見られることなく終わっていくものかもしれない。しかし、きっとこの世界の誰かはその舞を見て、新たな試みに乗り出していくように思うのだ。あの落ち葉の舞を見ていた私は、まさにそうした一人だろう。2017/10/21(土) 15:23

No.319: Music Composition Based on Unconsciousness

I decided to compose music based on not only my consciousness but also my unconsciousness. I suppose that our unconsciousness holds tremendous creative energy. I want to unleash it through music composition.

Basically, I have composed music on the basis of my thoughts and emotions that occur in my consciousness. From now on, I will endeavor to give a form of music not only to my conscious thoughts and emotions but also to my unconscious thoughts and emotions. For instance, what if I create music, remembering an inspirational dream that I had before?

I feel elevated and animated, thinking of the moment that I compose music based on the creative source derived from my unconsciousness. 9:56, Tuesday, 10/24/2017

1675. 舞と灯火

先ほど、落ち葉の最後の舞を見て、何か込み上げてくるものがあつた。私たちは、あの落ち葉のように、一つの舞を次の別の落ち葉の舞に伝承するような試みに従事しているだろうか。

あの落ち葉の舞に私が感銘を受けたのは、あの落ち葉が別の落ち葉のために舞っていたからではない。あの落ち葉は、自分の生命を本気で燃やして舞っていたことに対して、私は心を動かされたのである。

他の落ち葉を思ふ舞の中に、あれほどの激しさが宿るだろうか。落ち葉によっては、そうしたことが可能なものもあるかもしれないが、そうした落ち葉は稀だろう。私たち人間においてはどうか。いつも私の心を打つのは、固有の生命の灯火を激しく燃やしたその人独自の生き様である。

生命の灯火が伝承される条件。その一つには、徹底的に自己の生命を燃やして生きるということが挙げられるように思えて仕方ない。他者のために舞うことは、不純な風を呼ぶ。他者のために生きようとすることは、自分の生命の灯火に水を差すことである。そのように思えて仕方ない。

ここでいつも不思議な現象に遭遇する。それは、自らのために全身全霊で舞った者、自らの生命の灯火を激しく燃やした者たちの姿は、結果として他者に大きな影響を与えるということだ。

他者の存在が先にあるわけではない。個の究極的な先に他者が待っているのだ。

個の前に立ち現れる他者は偽りの他者である。その他者を意識して生きている限り、自らの舞を踊ることも、自らの生命の灯火に従って日々を生きることなどもできはしないだろう。そして、真に他者と出会うこともできはしない。

欧州の地で生きる毎日。それは、人間本質の無情なまでの孤独さと、孤独さの果てにある他者との出会いに向き合うことを自分に促す。

書斎の窓ガラスの向こう側に、羽アリのような小さな虫たちが小刻みに宙を待っている。バッハのゴルトベルク第30変奏が書斎の中に鳴り響く。その曲のリズムに合わせて、羽アリたちがダンスを踊っているように思えた。おそらく、事実として、羽アリたちはダンスを踊り、私もダンスを踊っていたのだろう。それを知った時、目頭が自然と熱くなった。

生きるということを生きるという生活。そんな日がいつかやってくれば、と思う自分がいた。

先ほど、仮眠から目覚める直前、子育てが終わり、妻と二人だけになった私は、北欧のどこか人の少ない場所で生活を営んでいる姿が見えた。他人との交流は、市場を切り盛りする人たちだけとの間で行われ、メールなど使わない生活。外との必要なやり取りは、手紙だけの生活。人間が人間として生きることの根底に立ち返るような生活。生きることを問うのではなく、生きるということを生きることを問い続ける生活。

太陽の隙間から依然として薄明るい光が差し込んでいる。一羽の鳥が地上に降り立つ姿を見て、夕方の仕事に取り掛かろうという意思が芽生えた。2017/10/21(土) 15:53

No.320: MOOCs and Music Education for Adults

In retrospect, MOOCs and music composition changed my life, which is not an exaggeration.

If I had not taken MOOCs about statistics, I could not have gotten admitted to the University of Groningen because of my previous statistical background. In addition, if I had not taken a MOOC about music composition, I would not have experienced the indescribable joy of composing music. These my personal experiences encourage me to devote myself to conducting research on MOOCs and music education.

Through my academic work, I would like to inform many adults of the potentiality of MOOCs and music education to enrich and transform their life. 17:47, Tuesday, 10/24/2017

1676. 沈みゆく夕日の中で

晴れ間を覗かせていた太陽が、西の空に沈みつつあるのを眺めている。夕方、突如として、天気雨がフローニンゲンの街に降り注いだ。それは、天から地上にまっすぐに降り注ぐ雨であった。太陽の光が雨滴に反射し、美しい輝きを放っている。

強い風が吹くことなく、雨が天から地上にまっすぐに輝きながら降り注ぐ様子は、不思議な恍惚感を引き起こした。激しい雨が降り始めたのと同時に、私は思わず書斎の窓の方に駆け寄った。何も考えることなく、雨の振る姿だけを見つめていた。雨の勢いが収まるまで、私はその場にいた。

雨が自分になることは不可能だが、自分が雨になることは可能だと思った。意識の性質について考えを巡らせたことがある人には、その意味がきっと伝わると思う。

雨は私たちに成れない。だが、私たちは雨になれる。

フローニンゲンの西の空に沈んでいく夕日が、神々しい黄色い光を発している。赤紫の夕日ではなく、黄色く輝く夕日は、バッハの音楽のようである。

夕方の仕事がひと段落したため、ソファに腰掛けて、モーツァルトとシューベルトの楽譜を眺めていた。自分の作曲に参考になることは何かないか、という意識で楽譜を眺めていた。参考にするべき箇所が無数にありすぎて、何から参考にして曲の中に反映していけばいいのかわからないぐらいで

ある。しかし、モーツァルトやシューベルトであったとしても、始まりは他の作曲家たちと同じだったはずだ。

ひらがなを初めて学んだあの日のように、作曲実践を進めていきたい。アルファベットを初めて学んだあの日のように、作曲実践を進めていきたい。

ひらがなを初めて学んだあの日から全てが始まった。アルファベットを初めて学んだあの日から、今日に至るまでの全ての出来事がある。始まりの平等性に人は気づくだろうか。

作曲や音楽について少しずつ学びながら、少しずつ曲を作っていく。その過程はまさに、単語から初めて一つの文章を生み出したあの日のことを思い起こさせる。文字を学び、文字で文章を初めて表現した時の記憶が、今、ありありと蘇る。

現段階での作品の中に、多くの不備があり、それがいかに未成熟であっても一向に構わらない。なぜなら、全ての作曲家は同様の道を辿ってきたと知っているからである。ここにもまた、一つの平等性が隠されていることに人は気づくだろうか。

何かが深まっていくことの中には、共通の道がある。そして、その共通の道の歩き方にその人の固有性が現れる。一本の道の中に多様な道があり、多様な道の中に一本の道があるというのは、こういうことなのだ。

神々しい黄色い光を発していた太陽が、雲の中に隠れた。先ほどの眩いほどの輝きはもう見えない。現象の一過性。音楽の創造過程においても、こうした現象の一過性が多分に含まれており、そして、それは大事にされるべきものなのではないかという考えが浮かぶ。

偉大な作曲家たちの作品を眺めて、つくづく感銘を受けるのは、現象の一過性を曲の中で具現化させながらも、それが一過性から永遠性に変容する点である。黄色く輝く美しい夕日を見た時の感覚は一過性のものでありながらも、それは永遠性に変容する種を持っている。感覚それ自体はもう過ぎ去ってしまったものなのだが、その感覚の中には、消え去ることのない感覚が残っているのは確かなのだ。それは、感覚の中に本質的に潜む永遠の諸相と表現できるかもしれない。

今、そうした感覚を言葉として書き留めている過程の中で、その一過性の感覚がもはや自分の内側に永遠のものとして存在し始めているのを感じる。音楽にせよ、言葉にせよ、両者の表現形式には、この世界の一過性の現象を永遠に変える力が秘められているような気がしてならない。2017/10/21 (土)18:10

No.321: Online Education & Music Education

I determined to conduct research on MOOCs and music education next year. I cannot choose either one of them. These two subjects attract my academic interests very much.

Since I have not conducted research on music, I will elaborate my research plan and start my research project next year on that topic. It would be wise for me to focus on MOOCs this year. The research on MOOCs will cultivate my knowledge and skills of educational science, developmental science, systems science, and network science. This experience will lead to the next research topic on music.

I cannot repress my motivation to conduct research on these two domains of education; online education and music education. 20:34, Tuesday, 10/24/2017

1677. フレデリック・ショパンとの出会い

いつもとは少しばかり異なる一日が始まった。そんなことを思わせる日曜日の始まりだった。

今朝は起床直後に、突如として、ハイドンの残した楽曲について気になっていた。起床直後に歯磨きをしている最中も、歯磨き後に身体を目覚めさせる運動をしている最中も、ずっとハイドンの音楽が頭から離れることはなかった。そのため、今日の仕事を始める前に、ハイドンのピアノ曲でいい楽譜はないかを探していた。いくつか候補が見つかったところで、ハイドンが多く残したピアノソナタの形式ではなく、曲の長さが短いものを探していたところ、偶然ショパンの楽譜を見つけた。中身を一瞥すると、何か光るものがあった。724ページに及ぶが、“Chopin: The Ultimate Piano Collection”を購入してみようと思う。

この分厚い楽譜には、「マズルカ」「バラード」「ノクターン」「前奏曲集」「練習曲」「ポロネーズ」など、三曲のピアノソナタを除けば、ほぼ全てのショパンのピアノ曲が収録されているようだ。

ちょうど先週に、ショパンが書き残した一連の手紙が収録された書籍を購入していた。まだ届いていないが、以前からショパンの生き方と音楽には関心があったようなのだ。それが今朝、何か結界が崩壊したかのように、ショパンの曲に強い関心を示した自分がいる。とりわけ、ショパンが「マズルカ」のジャンルを通して残していった一連の曲に惹かれるものがあった。

曲そのものはこれからじっくりと聴いてみる必要があるが、私がショパンのマズルカのどのような点に惹かれたかという、それはショパンが、日記を綴るように一連の曲を作曲していったことだ。日記を綴るようにマズルカの作品を生み出していたのであれば、それらの作品の中に、ショパンの日々の心の機微が反映されていると言っても過言ではないのではないか、そのようなことを思った。

そもそもマズルカとは、ショパンの祖国であるポーランドの民族舞曲である。ショパンが没した地は、フランスのパリであるが、ショパンは生涯にわたって祖国を想う気持ちを強く持ち続けた。異国の地で祖国を想い、そうした気持ちと相まって日々の自分の心情を、日記を綴るかのように表現していったマズルカの作品群にとっても関心がある。

ショパン。これまでは作品を単に聴き流すことしかしていなかったが、もはやそのような形でショパンと向き合うことができなくなった。ショパンが生涯にわたって書き残した手紙の収められた書籍を購入したのも、そうした意味があったのかもしれない。また、ショパンが「ピアノの詩人」と形容されるように、ピアノを通じて詩を書くかのように、そして日記を綴るかのように曲を残していったことに、大きな感銘と共感の念を覚える。

私のグーグルマップ上に、ワルシャワにあるショパン博物館に星印がつけられていたことに気づいた。フローニンゲンからワルシャワまでは遠くない。欧州にいる間にぜひともショパンの祖国ポーランドに足を運び、ワルシャワにある博物館を訪れてみたいと思う。来年の春、もしくは夏に、その場所を訪れることに決めた。2017/10/22(日)08:47

【追記】

上記の日記を読んで、ショパンが日記を書くように作曲したことに範を求めたいと改めて思った。また、ショパンは「ピアノの詩人」と呼ばれるように、作曲を通じて日記を執筆するのみならず、詩的世界を表現していった。上記の日記で述べているように、その後私は、実際にワルシャワに訪れ、ショパン博物館に足を運んだ。その時の記憶が蘇り、ショパンのように、まるで日記を書くかのように、そして詩を書くかのように曲を創造していきたいと改めて思った。フローニンゲン:2018/12/27(木)
17:32

No.322: Gigantic Black Snake

A gigantic black snake appeared in the dream that I had last night. It looked very tame not aggressive. The snake was slowly moving from the window of the balcony to my room.

I asked my friend to let it go from the window of the bedroom. We watched the slow move of the snake for a while, and my friend finally let it go from the window of the bedroom after a short while. However, he was scratched by two needles of the end of the tail of the snake. He was worried about whether the needles had poison or not. Since I intuitively knew that they had no poison, I told him it was fine.

After I made sure that he was alright, I looked down from the window to the ground to see where the snake is. Yet, the snake already disappeared.

What does this dream represent? What does the gigantic black snake symbolize? 07:27,
Wednesday, 10/25/2017

1678. ショパンの望郷の想い

雨がポタポタと屋根に落ちる音が聞こえて来る。寒い日曜日の朝。

空一面が真っ白い雲に覆われている。それらは、黒い雨雲ではなく、うっすらとした雲の膜であり、雲の向こう側を見ることができるのではないか、という期待を起こさせる雲だ。

しかし、それらは雨雲には変わりなく、白じろとした雲がまた、早朝の寒さを強め、どこか物悲しさを生み出している。

六時に起床して以降、ショパンについてずっと調べている。今日の午前中に予定していた仕事に着手することなく、一切をそっちのけで、ショパンの生き様について調べ続けていた。そんな休日があつていいのかもしれない。

早朝から、260曲、19時間に及ぶ、ショパンの全集を聴き始めた。これまでショパンの音楽を何気なく聴いているだけであり、なぜそれほど強い関心を持たなかったのか、とても不思議に思う。それはもう、そういう時期だったとしか言いようのないものである。

外の世界には多くの雨粒が地上に降り注いでいるのに、自分の内側の世界から言葉がうまく出てこない。起床した直後に、今朝の段階では言葉がうまく生まれてこないだろう、という不思議な予感的感覚があつた。自分の核の部分、存在の基底から出てくるような形でなかなか言葉が生まれないかもしれない、という感覚が起床した時点ですでにあつたのである。言葉がうまく出てこない感覚に包まれながら、私は夢中になってショパンについて調べていた。

読んでいたのは文字であるが、自分の内側からは文字がうまく出てこないという感覚。しかし、今書斎の中で奏でられているショパンの音楽は、実に雄弁だ。

明日にでもワルシャワを訪れたいという衝動的な思い。仮に来月にオランダのいくつかの都市を巡る計画がなければ、来月にでもワルシャワに足を伸ばしていたのではないかと思うぐらいに、ショパン博物館のあるワルシャワに足を運びたいという思いが強くなっている。

ショパンが詩を書くように、そして、日記を綴るように音楽を創出していった姿勢に大きな感銘と共感の念を抱いたことは、すでに書き留めておいたように思う。もう一つ、ショパンがピアノという一つの楽器をこよなく愛したことも、ショパンへの敬愛の念を強めるきっかけになっている。実際に、ショパンが書き残した多くの曲はピアノ曲であり、独奏曲が極めて多い。

一つの楽器、一つのものを追求したショパンの姿勢に打たれるものがある。ピアノの持つ可能性を最後の最後まで探究したショパンの姿には、大きな励ましを得るとしか言いようがない。そうした側

面のみならず、ショパンが反乱のために母国のポーランドを離れざるをえなくなった時、「一度この場所を去ると、二度とここには戻って来られないような気がしている」と述べた言葉が、自分の心に刺さった。同じ思いと感覚が自分の中にあるからだろうか。その一文だけを何度も読み返す自分がその場にいた。

雨音が激しくなり、今日は一日中雨だという予報が出ている。ショパンの曲を頼りに、そろそろ今日の仕事に取り掛かろうと思う。もう戻れないかもしれないし、戻らないかもしれないという思いを抱えながら、それでも前に一歩踏み出そうと思う。踏み出す一歩は常に、自分が想う場所とつながっているのだと信じたい。2017/10/22(日)10:16

No.323: Toward Interdisciplinary Research

I was still thinking about what I was contemplating yesterday. That was about my research projects next year. I want to conduct two small studies on MOOCs and music education for adults. The former is continuous with what I am currently doing, whereas the latter is a new research topic for me.

I am oscillating between the two topics; I am wondering which one more stimulates my research passion. Since I have conducted some research on online education before, I can utilize my previous knowledge and skills for the former research topic. Thus, the former is more practical and feasible for me. On the other hand, the latter topic has recently captured my interests in a vigorous way, although I have never done research on it.

If I focused on the latter, I would research on the developmental processes of piano performance and music composition skills of adults. In addition, I would conduct qualitative research on aesthetic music experience of adults.

In either case, my research will be interdisciplinary in that I will apply various theories and approaches in diverse scientific domains; educational science, developmental science, systems science, and network science. If I chose the latter topic, I could add philosophy— aesthetics—

in my research, which is very attractive to me. Is it time to slightly change the direction of my research? 17:41, Wednesday, 10/25/2017

1679. とある日曜日の午前に

今日の午前中は、気づけば結局、一切の仕事に着手しなかった。早朝の六時半から正午まで、ずっと音楽に関する調べ物をしていて。とりわけ、ショパンの生き様と彼の作品について多くの時間を充てて調べていたように思う。ショパンに対して行ったのと同様のような調べ方を、リストとメンデルスゾーンに対しても行っていた。その結果として、六時間弱に及ぶ時間を音楽に関する調べ物に充てる形となった。

以前、自分の作曲体験を振り返りながら、作曲実践には、精神の治癒と変容を促す作用があるということを書き留めていたように思う。もしかすると、そうした作用をもたらす要因に、音楽がもたらす没入的脱体現象があるように思う。作曲をしている最中にたびたび起こるのは、作曲行為の中に入り込んでいく感覚であり、身体が曲になる感覚である。

作曲を始めてからまだ数ヶ月しか経っていないため、今の段階でそのようなことを述べるのはひどく大げさだが、初心者の段階においても、作曲行為の中にはそのような現象を引き起こす力があるように思う。

自らの身体を作曲行為に明け渡し、身体が作曲行為そのものと曲そのものに合一する感覚。そのような感覚を毎晩一時間ほどの作曲実践の中で体験しているように思う。それはある種の非日常体験である。作曲行為は、非日常性を私の日常にもたらししてくれる掛け替えのないものになりつつある。

今朝から正午にかけての自分の行動を振り返ってみると、そのような非日常的意識の中にいたのかもしれない。音楽について調べているだけであるのに、そこに没入的脱体現象が起こっていたことは注目に値する。

音楽というものがますます分からなくなり、その奥深さには圧倒されるばかりである。同時に、何よりも音楽の魅力というものを大きく見出し始めた時期に今の私はいるようだ。

メンデルスゾーンについて調べている時、昨年の夏にライプチヒを訪れた際の記憶が蘇ってきた。ライプチヒにあるメンデルスゾーン博物館で、決して忘れることのできない体験をしたのである。その体験については、その時の日記に書き記しておいたため、ここで再度取り上げることをしない。だが、今日改めて思い出された記憶について書き留めておくと、メンデルスゾーンが残した楽譜のみならず、彼の類稀な絵画的才能によって生み出されたスケッチ画の数々が印象に残っている。絵画作品を鑑賞するかのような姿勢と観点を持って、メンデルスゾーンの楽曲を改めて聴いてみようと思う。

結局私は昼食前に、724ページに及ぶ“Chopin: The Ultimate Piano Collection”という楽譜を購入した。わずか一、二ページほどの小作品の中に、どうすればあれほどまでに傑出した音楽世界を表現することができるのかを学ぶために、この楽譜を購入した。

ショパンが七歳の頃に初めて作曲した『ポロネーズト短調』のような作品を自分が生み出すには、これからまだ随分と時間がかかるだろう。そうだとすると、ショパンと同じように、毎日日記を執筆するように、一つ一つ小さな作品を生み出していくことを継続させていきたい。その継続の先に、今の自分では全く見ることのできない境地が広がっている気がしてならない。それが学習の、ひいては人間発達の本質である。2017/10/22(日)12:59

No.324: Active Reading

I noticed that I gradually constructed the knowledge foundation of contents of the courses that I am taking in this semester. The key was reading the texts again and again in an active way; I read aloud them and explained the contents to my self in my own words. It was beneficial practice to enable me to solidify my knowledge networks.

Not passive but active repeating reading is quite helpful for my learning. Since reading loud and explaining the contents to me probably activate my brain, I often lose my sense of time when I am doing it. In fact, three hours quickly passed in the evening while I was engaging in such an active reading. I will continue this practice when I read something important for me.

早いもので今日も夕方の時刻となった。振り返ってみると、今日は一日中、音楽のことで頭が一杯であったように思う。午後からは、教育科学に関する論文を三本ほど読んでいたが、その時にも音楽のことが頭の片隅にあった。とりわけ、音楽教育に関する主題が私を捉えてやまなかった。

現在、日本企業との協働プロジェクトのおかげもあり、企業社会という文脈における成人がどのように知性を発達させていくのかについては、十分に研究を進めることができる。一方で、自分の中には、企業社会とは全く異なる文脈で、成人教育や成人発達について研究をしたいという強い思いが芽生え始めている。

定年退職をし、そこで一念発起をしてピアノを習い始めるシニアの方たちも多いだろう。また、私のように、全く音楽経験がない者が作曲の学習をし始めるということもあるだろう。私の中に湧き上がっている関心は、成人はどのように音楽を学んでいくのだろうか、というものだ。

究極的には、成人はどのように音楽を学び、音楽に関する知的理解と音楽技術の向上のみならず、音楽を通じていかにして自らの人格を涵養させていくのか、という点に大きな関心がある。私たち大人は、どのように音楽を学ぶのだろうか。そして、音楽を通じて、私たちはどのように人間としての器を発達させていくのだろうか。そのようなことについて今日はずっと考えていた。

ピアノの演奏技術、作曲技術、音楽理論の理解という三つの研究領域を仮に設定した。その背景には、まずは、成人の音楽に関する知的理解の発達プロセスと、音楽技術に関する発達プロセスの両面を知りたいという思いがある。それらの発達プロセスを探究するために、どのような研究手法が適用できるかを考えていた。定性的な方法に関しては、これまで行ってきたように、構造化インタビューや半構造化インタビューのような手法があり、文章記述型の手法がある。

一方、定量的な方法に関しては、どのようなものがあるかについてより多くの時間を使って考えていた。ピアノの演奏技術に関して定量的なデータを集めるためには、例えば、ピアノの演奏を録画・録音し、録画・録音データに対して、何らかの基準によって定量化していくことができるだろう、という考えがすぐに思いついた。このアイデアだと、データ収集と定量化に労力がかかることは止むをえ

ないが、仮にこの案を採用する場合に、どのように定量化していくかについて二、三アイデアをノートに書き留めていた。

同じように、作曲技術の発達プロセスの解明に向けた定量化についても考えていた。正直なところ、確かにピアノ演奏を録画・録音する方法は手間がかかるが、こちらのデータは、一分一秒単位の時系列データとなりうる。一方で、作曲技術については、リアルタイムのデータを集めづらいという点がある。

私の構想の中で、最も面白いと思うのは、システム科学とネットワーク科学の観点から、成人の学習や発達を捉えていくことにあるため、ピアノ演奏のように仮に時系列データを集めることができれば、ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスの諸々の手法、さらには、ネットワーク科学の様々な分析手法を活用することができる。そうした意味において、ピアノ演奏を録画・録音するという方法は魅力的である。それでは、作曲技術についても時系列データを集めるにはどうしたらいいかを考えていた。

最も理想的なのはリアルタイムでのデータがだが、やはり作曲についてはそのデータ収集が難しい。ただし、作曲に関するワークショップのようなものの中であれば、その様子を録画することによって時系列データにすることが可能だと思った。もし、リアルタイムでの作曲技術の発達プロセスに囚われることなく、より時間軸を広げれば、毎週に貸す作曲の課題に対して、何らかの定量化の基準を設ければ、一週間ごとのデータを収集することができる。さらには、その課題に対して、音楽理論の観点から定量化を施せば、毎週に作った曲の変動性や複雑性の度合いを分析することは可能であり、その曲が持つ動的な運動を分析・可視化することができる。

成人の音楽理論に関する理解力の発達プロセスに関しては、これまでの研究の延長線上に過ぎないので、こちらは比較的簡単に研究することができる。それは領域は違えど、企業人の戦略理解力の発達を研究するのとはほぼ同じアプローチで研究することができる。

それら三つの研究領域と分析方法について考えた後に、それではどのような被験者を対象にするかを考えていた。ピアノの演奏に関しては、世界中どの街でもピアノ教室があり、例えば、来年に所属予定の米国の大学の周りにも数多くのピアノ教室がある。そうしたことから、こうしたピアノ教室と

提携し、そのスクール生に研究に参加してもらおうというのは一つの案である。こうしたピアノ教室であれば、初心者から中級者、さらには上級者という三つの区分の被験者に参加を依頼することも可能なのではないかと思い、この案は実行性がありそうだと判断した。

また、作曲技術と音楽理論に関してはどのような被験者に参加してもらうかを考えていた。時折、音楽教室の中に作曲レッスンも提供されていることがあるが、それほど多くはない。仮に、ピアノレッスンと作曲レッスンの双方を提供している成人向けの音楽スクールがあれば、理想的な研究協力者となる。もしそうしたスクールがなければ、来年所属予定の音楽科や近くの音楽院に研究の協力依頼をし、その学生に被験者になってもらうという方法がある。

今日は本当に、音楽に身も心も取り憑かれているような日だった。上記の研究が実際に行えるかは現段階では不明だが、私としては是非行ってみたい研究である。それは、私自身が成人になってから音楽の魅力に気づき、実際に数ヶ月前から作曲を本格的に行い始めたという個人的な理由がある。また、企業人の学習や発達、さらにはオンライン教育だけではなく、これまでの自分の探究で培ってきた知見を他の領域に適用してみたいという思いがあることも見過ごすことはできない。

来年に所属予定の大学で、オンライン教育と成人の音楽教育に関する学術研究と、それに並行して、日本企業との協働プロジェクトを通じて、企業人の学習や発達についても引き続き研究を進めていくことができれば、それ以上に望むことはないと言える。2017/10/22(日) 18:21

No.325: Impossibility and Possibility

The dream that I had last night explicitly indicated that I could not come back to the business world. In other words, I realized that I could not work in a company anymore.

To describe the dream would be verbose, but the theme was about the impossibility for me to become a full-time worker in a company. I know that it is impossible in a company to pursue truth, goodness, and beauty to the extent to that I imagine. At the same time, I already know that I can pursue it as long as I can keep my present lifestyle. Morning, Thursday, 10/26/2017